国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

208
12
705

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

孝女貞婦玉川お喜三編巻之下

江戸　爲永春水著

第十七回

ひろ一両國の廣耕地米澤町の平岩左内ちゝの姓を得る名人あり世間の中に秘入る物を言當るおのも不遠神明の所為と賞らるゝ一人あり一部仏菓の候ふ名を一百色占ちの山吉を廿九十九号まで一色ずつ遠ちく當り今一品ゐて百品ゐ滿る時左内八ちゝく

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

首を傾け眉ふ皺せて考へゞ什方なきもあるを
強く言當らまゞと中せゝば主君公の近習の士怪
ゝの家ふ是だうハ當ふゞやとゆまゞ左内言て遂ゞこれハ陰
陽ともふ備ゝる人の稟受るゆを入まゝ見いまゝく
男女を一形ふゝる人がゆらふとハ男まゝひゞとゆゝゝゞ彼
若ゝハ矣ハせゆひて左もゆゝゞ皆の中ふハ聚楽彼復美の
名を書て入をゝゝと仰せらまゝ時左内ハ涙ゝ眉を開き
左様ゆそひゞ瀬川菊次郎仙寛ゝとゝゆひん男ゆて左ゞ

女も不及ゆどの艶しき情をゝるゆ者ハ女形の中ふて
瀬川菊次郎の外ふ三ヶ津ふ似寄りゝゆゝ方ふと
中ゆげゝまゞ若ハ陰ふ深く人ゝゆやゝゝ皆の蓋をゝう
除て看るふ瀬川菊次郎と言るゝてゆりゝゞ実ふ美ゝ人の
類ひ稀なる名譽ゆて亦彼俳優を世ふ有ゞ元女形の中
樹とゝゝ思ハるゝ彼菊次郎ハ男なれバ女の情を心底持て自
然ゆ知るゝふゆもその卦象を顧ゝゝゆ是をゆふして腹れゝ
身のゝとゝるゝ知ゝ異見ゝゝゝゞゞ邪見ゝゝゝを

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

慎み深く和を第一として荒々しき言の葉も出さぬものと常ふ知らげうへへ顔うちのく羅髪ともに朝の賤しくては宮の女こゝはいふべうこゝは女の真似をする役者の女形ハ劣て第夏荒々しき女もあるハ最とづうき所あると用心すべきき夏ふこゝもあるべくこゝハ紅剃事の癖ハ本文ハいふざる冠語ゑとゞもお湯お方のごき孝女貞婦の貞節ハ漢てうまれぞ身の風俗を正ハ助けて看るべひね

このもちあそ深山ぐくまの朽木のもと

知ハ花ふるさだたうゑん

その花とそ色めゝ〳〵 仇なる花を好むひとハあるまじけまど活業のうハ見ぬるき花柳風よ散りゝびきもさるうゝ色のうゑうその歌枝の往来絵ざる花水檜半賤郎集の賤ひハ三國一の景色なるべ〳〵いとど賤ふ英雄時ハ今拵ハ男女の中とまハ互ふ色香の男女右左ゝ行向ひ

女ハ友さん代程ハ男イヤお王さん代ハ早くゝうけよ 王ハ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

きの松いろ〳〵まつて宮ゐ様〳〵とお世話さるゐふるうまつて
お待のいろ〳〵様もおぎわるませんと正蔵ゐ言へど何とまく
電報おぐる〳〵河の花姿の花ハ柳の中ゐ一陣目立歌波
風四辺をたちゐ美人まうけう　友へイエナニうぐうだろうとの
おこをお待ぐだいこゝ入つまるそまハ花も角もこれゐ
お座敷へ　王へイエ今明て帰るのでおぐわるまるョお茶
さんハエ　友へ私しゃア　向ゐ河岸まで用ゲあつて行ぐ今
帰うるまず　王へヨヤ〳〵然ぐどぎわるまるゐ丈ゲやア何幸チョイと

まア　お出ゑ成てゆきいまつす　友へ何故ゑ人何ぐ用ゲ
あるのゑゐ　王へイエ然ぐやアあるませんゲ此るのお待も
いこゝ〳〵お方さんゆゐ　お頼ゑやて上度ことぐおぎわるま
まゲ途中ぐ丈ゐ　紫末ませんゑゐト言へ〳〵そ
繋のこゑ五用ゐ〳〵ぐゐ頭上を捻き何ゐ知るひのゐ
頼ゑて友次郎の白を視るその服りをゆ〳〵かこの
わゐ眼ぐち元来磨ぐ活業ゑて坂ぬけ〳〵ゐ笑
繋熟ゑ玄地めて指折の生暮ゐ先達大達者責御

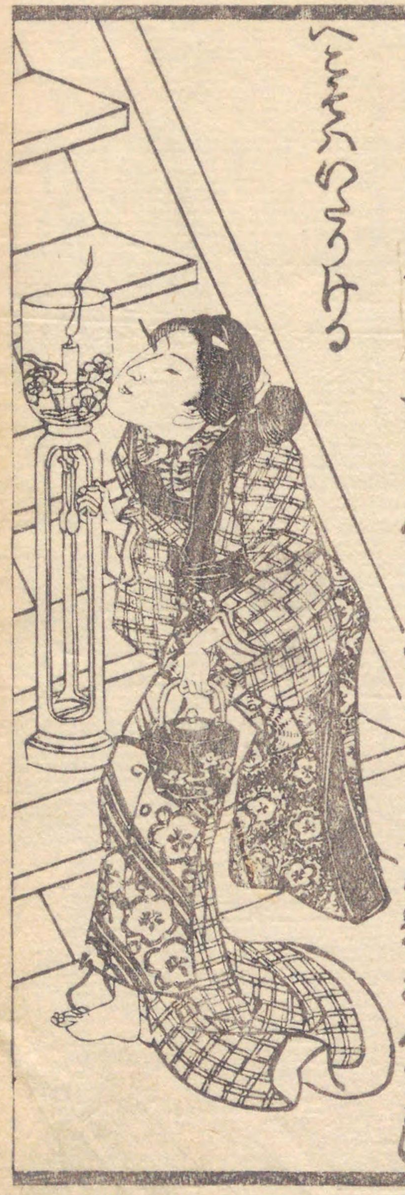
国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

橋の船宿中ふ毛数すめと修るも言くお客の見屋も
笑けまど意気地を張くるの根をふるゝ雪性
浮勝まるくわどのきぶよく産毛の勤ぶと為て沙汰せ
代お玉ゞ勝くくしる服顔の色此時よりうて友次郎八
臭女お万へ義理源きその臭のとをつまれてろおあの
笑羅り見勝つく放ゆとする意養の闇他の見る眼も
思ふハ孤を知るねふ答るけまど お豆ぞお万ゞ徒母の孔
念ゆふり血筋の実まおあをりて友次郎の如を蔦ふ



新ちるるゝ俄おあをちとハしくく如を孔を閑果のゝ口
結ぶもわゝき家ふゞゝ言るお万のゆゝ臭あておあのを
わを華ひふ体ゝゝ仏夕月歌さくくゝる浮蔦ふ似さ
まど互ふ焼しき相見俗あて程をゝふ小料理屋の二階
へとそハゝうける

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

上方へ思ひとゞまる其日よりこゝろ癖つけてゐるうち
まづ分のことけを打明てのち酒のもうまづくこ
ゝまあげられぬ仇ぶしを女子の乙ぶるめる情
くらふとゝもうと合ゐげの情と一下歩さの花びて
ゆきさんせ。やれのくと頼りくに涙き思ひ小の川ふ
ぬまて哀まに風情なり
玉八や宝ふ沙賣でありまに工まぐ年の行るひ娘の
極ごけまとゞも郷ゞ雑ぎらぎかまに友へ左極ず妙ふ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705
ガラス使用

わるぢぷひ好風さ奏ぐさまとし迷ふ分るちぐノ　玉ハヲヤ
空ぢうう何卒他へも出お遠ひの根ゐら焼しいけま
どもお方さんの外をバ看病もあるまひと思ひてお在ざ
うまトいひつ完ふ顔紫殺とぐ〳〵千風ふの
底ふ了当ありてゐる安ー酒のみろ辞ふ模ろるゐ考き
男の知ハ千金の賊ふ代ても惜うまぢと脱込ひ容姿の
姉娜ものう　玉ハヱ友さんお家根ア　わんまうでおざる
まバるヱ　友ハナニ何根して解うぐといふのぐヱ何ぐろ私ゆハ

解せるひ子　玉ハアサそまぢうても私ゴ先刻ぃうふ乳を
揺んでいよのふ出ス接拶ぐで茶ろーてお在ざろふ家
強ひどわアるひうれハ　友ハヲヤ何を仕身ゴ乳強ひるのを
言ろうけノウ　玉ハナァニ子お家さんゴ乳づようひおとを
お言ぐとハヤませんヨ　友ハそまぢどやア乳ばうひとりハ
のハ何の変ヱ　玉ハアレマア悪ふしのわハ先刻ふ私のハ
まとを知ふるひ顔をして乳づうくだろうしてお在どやア
あうませんろ　ぢまろとふれハ　友ハ何故そ根ふぢれう

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

度の仏様も解るひ　玉へアレサ　そこ指るゝ　他るのくしく
不解つのりふして居ごんぶと宜じやアありませんか　友へ
でも不解ようつるひとりのごアナ　そして先刻のうら
お茶ぶ気をもむこふ　仏のうのうそこぶまうしとい　翁を委
ちくそるーゆ　玉へアレサ　そこぶまうしとりのでゆり
まぶはそうやアモウ　お方さんの　指るゝ業　内宮指されて
お在のお茶さんの変ごんぶ　見ても　私の指るゝものが仏と
男門でお墓ひゆふしても　所詮ちくぶるひ　変でゆりまく

けどぶ指るゝふ　ゆをゆやまうて　お預ひゆくさのごんぶ
ようそうそふごとなりして　お呉までも　宜ちやどござゆ
ませんゆト

酒が言へまる　ぶるぐぶ　お方の義理をも知り
ぶごん遂ひそもる　男果の所為　母の服さの
執念が　腹ふ　仕ごん友次郎ふ　意を　結び　嫌しく
あやしき　業う　彼迷服ふ　意を　結び　嫌しく
まる友次郎へ　お玉を　手理ふ　恢さをて　不便と

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

男ふか玉のごとくふ友次郎を力とさせ勝ゝと
思ひしーか万ろう妬ゝ心を発させて気を悩
まさんとてたゞひろう嫉もわらざりせばこの
京伝ハ作者の義太言解ふ
弱ろうろうーさまども男女の迷ひの乃ゝと親の
ひのこを思ふハ他見の坪まハるねものろう

○人の親の知ハやゝふあらねども
ろふ知ふまゝひねろる

第十八回

いろも香もさぐひろうゆゝしの梅とともみ開きてかーき
名所のふゝ　友ヽヨヤ此扇ふ書さふハ　ほ義さんぐらゝさ
津西国名所とふ小本ふ見て帆引町のお幸さんとのふ
のゞ　泳ぐ　ぐ　奇ぐ　泳ぐ　扇ヽ　書さのゞノウ　玉ヽさゝハあの
本の西ふわりさ奇ぐ　おゝーろハ　梅ざろう　私がうゝーさのゞ
ざのまゝハヨ悪ふで書さろふ他人ふ見ゝさもちやヲ　知ませんハ
トヽ　扇をさろ　友ヽエ　お幸のろハ　イヤさろやノ　絹

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

代ゞ私しやう又董齋先生の御ぐらう〳〵お秋の
書さのごゝゝゝ為が身うんゞ実に感ぜのゥ玉へアレサもん
なるのを言て呼ーを脱うーて仕事へぎゝも先刻ゝら
私が気をもむるを行ゝる返ゝのをしてお客ゝんなるなる
惜ふしひるト言ゝ船頭なる眼元みて友次郎の顔を見
客見居惜ゝくゝ様ーー姿の色古風な小町や揚屋妃さま
へで覚る風俗ゝゝゝ意が窪ゆも和奇町みるゝゝゝゝゝね
その髪色ある是古今ゝまる是ゝるゝゝ嬰女の大達者ゝ頃

紀氏惜めて八丈一実と惜ゝえゝう友次郎ハ公のうちゝ
花宣振ゝ思ゝども従客と堪へてお玉ゝ友ゝゝゝゝ
お秋ア気でも遠ひゝ仕ゝひゝ不ゝ言と和ゝとゝゝゝけ
まゞ〳〵ゝゝゝの鼻の上で居るゝゝ什身の振る者ゝを
振るゝを言て障ゝ障ゝゝ後悔ゝゝゝゝゝゝゝゼ玉ハ五ゝ振る
表向の様ゝをお言で逃て仕ゝゝゝゝゝゝゝゝ
仏様も今更ゝ思ひ切ゝゝゝハ生来ゝゝんョ文ゝゝゝゝ
きんゝ仏様ゝゝゝゝゝ言のゝゝゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705
ガラス使用

人あるに貧をんなるして乱で仕まふ宜ぶるまたトる
程く世でのようるまで実ふ乱底男の込く迷ひの引てハ
るくふ乱新まぶき子月隠可憐見ゆまど中乃甘ぶ又情と
考へ見るふおふが行状、ぶ月ぶ委しく知らる牛薄も男女
婦枝の淫ほ落るる初ひめくるのもなく男を敷き合ち浪を
貪る類ひのるもの職しき乱の巧など絡て呼もあぶれば
今のよるも家わて異ひ初る宮ると男りて見まハまる
更ふるる乱婦横の高のまた乱まそやきしき家の下見で

捨ふまれお玉の美業吟くしるうて近寄るも彼既会の
前雲るるる異しき男女の情態とり〳〵 友コウ お玉さん
お糸の先刻くく言ふを分をひのと思りて居ふが
分ふ今の里でハ枝ふも不豆私の極るものでも出ハ
分ふる思りて呉ん成ぶ様ふ藤へふが泥然ふぶまるア
お糸の要のてのふど異見を言ハとする所ぶアア言ハ
ふひで根浅おまふるふがお糸実西るまもんふふる
ど一の文句ぶわアわへが酒のよさハ言せるへゼ 玉アレサ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

お茶様も結び添ひわく行程松が浅ましき者ごと喜
様く添ひ長理のあるお茶まんへ射して很令深気な
ものもしろ脇で海ものでおぼるまたの理ハ
会へまぐら分程しと男果が高らぐくとトのく析らふ下座
会で術郷ろう三味線の音じゃふて
一ハ男男性のまつくとまるぬがものちがぎを
人ごうくとまきうくの海のらしくふ高まんぐち
まるいせくハ初まのうり　金〳〵そまぬがくとり後

東の歌毎ホ東ろまもとうらうの湾へねハ
あんきとしまるを　シテ〳〵けして寝さまき
帯ひもを下界
玉〳〵ヤ術郷る訴ざねく　友〳〵ヨ然ョ高〳〵一中弟ホ
少〳〵船郷まざる高ざのウ　玉〳〵ヤそまでも松ちの
雪〳〵ハの方ゲ宜おざるまたハ。フノウ屋アの輝で分
でも高ぶく浦るゲ祇の苦く浦〳〵ゲ一中の弟ざのとりて
自然居士とやふるんぞを国せらまるを松まやア猿ゲ痛

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705
ガラス使用

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

あるいて行きませんい　友へアハヽヽヽヽあぶけるひるのものをのふぜ一中
第をゆうて脳が痛くなりちやア　江戸第でハ頭痛が発
じやうふ　玉へヲホヽヽヽ　ナニおぢやアありませんこれ程私が腹
暮でも一中第を喪がまろうひのでふおぢかませんヨ宮
ふかぐろ深ひをうふ桜る　家ようも宮氏に異変なおつで
うふまろを疲が痛くなりまたと言ものサ　友へハア左様ろ
叶臭い　まるとおもハ一中を勝ひごと言ふのうとおもうと
丈ハ神がお茶いりゝ今の幼持ハ実ふ人　玉へ何空そづ

ゝらゝいうのを言ましたあるう　友へ丈るふ氏臭も公
風をさんてかるが後月で取をうせらまる桜ごと世る
ハ元来か方へ射ゝても頼向のるうひるぶぶお塚の生
根ふかゝでも二のはを踏なわぶるげハるひ人　玉へヲヤ
そまアア私の方で言ものておぢるをハかきんと横鉄
高さ四間ふさんのお在成おまきんへ職ゝの臭ふの私
うんぢるふるのゝハかるぶうるのふやまゝひおかを宮岡
四ひ込んでうふ迷ひの中ふも第度ろ知ふ異見をゝて

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

公の国果ら四郎公の門さ参へて居
のぐら男だのうゝ公程しても帰らぬ三人男がうら寞
利が要ひ怖ろしのと知で知を記めても直ふ踏ふ意ひ金ぐ
弄ることいつく人でのと世るの人の清り程を来わぞ此
程ふ言出しことのでおさるまたふ公卒怪思しとお其成
まゝショト
言葉ふゝ樓衆暮を言出しふる気の毒さを
ぐふ恥て赤ふゝ顔ふ名香を懐懐暮ふ人お方の

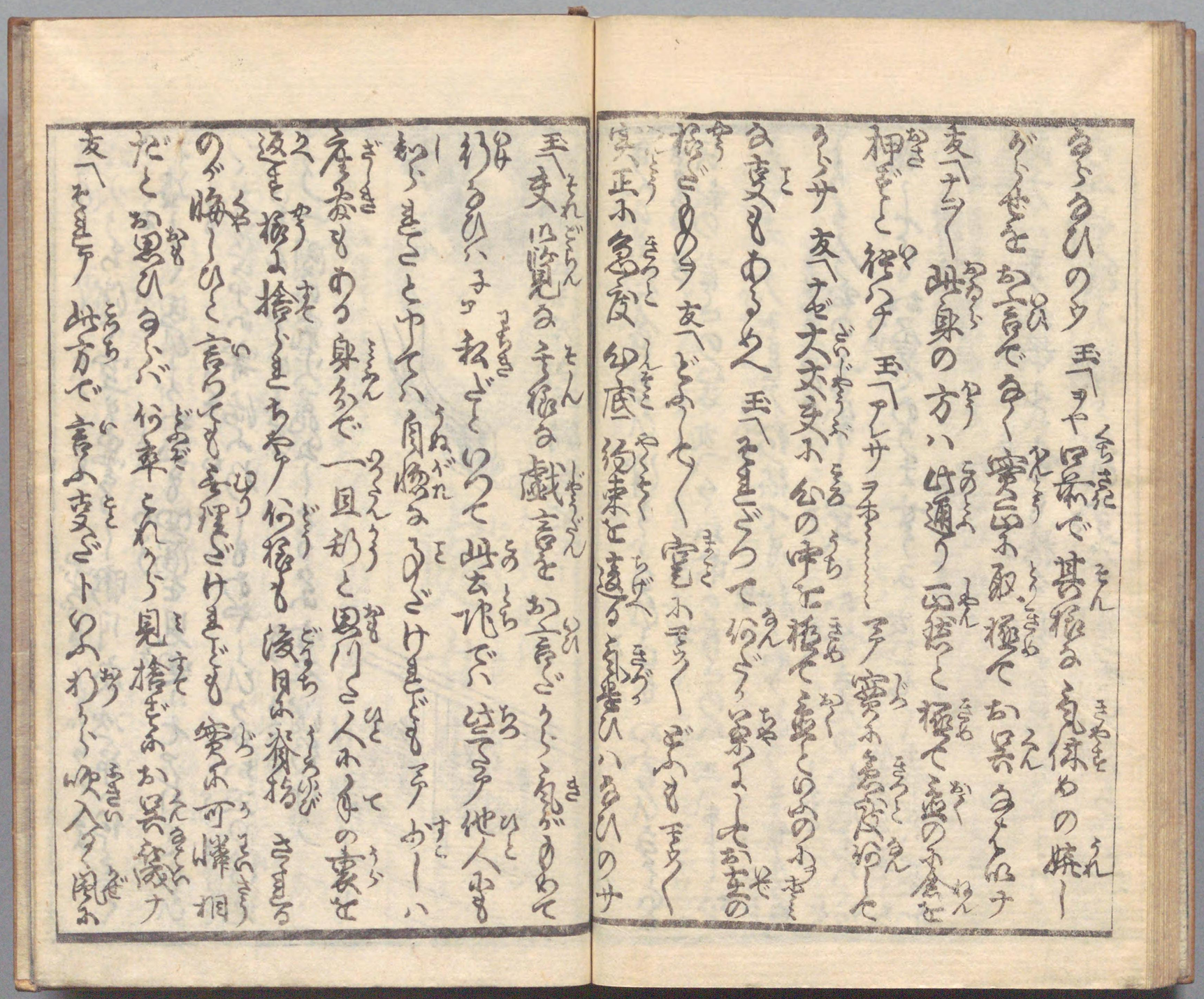
徒安の眼ミの金の色ぢこざめて実の涙のお玉まで
不憫の女とまるとふ思ふる迷ひの存金とのぐ
此時友次郎ふお玉の顔を倩眺ふ今動ゝく眺ふめ
のふねど暮ふ公の屋ふふ貴妃も小町も古風らく
近く知ふ品宝をふつく競て思ひやまぐ田舎源氏の合巻
ふ國ふ負ふ国ふる美人の中の雅ふ人ぐ考へ
てもお玉がまさる程ふ思ふ迷ふ分ゝゆゝさを
徒安ふあふて矣公顔 文 公も惟思ふのふ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705
ガラス使用

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

きんゐも似合ふ方ゆゑ　お言ひなさるなら
只私の言さのつま　友へ〻お糸の言さのハ　玉〻ホ〻〻〻〻
言いなさるまでもなく　お招でも　能じやあります　せんろ安
ようう今私の言ふ通　言ふ通ハ　お糸さんの心底ハ　お
招しても　お客でゐます　友へ〻も　表向ハ　某お
あて　内心ハ　客ごとハ　お糸の　知らぬハ　ゐるうち　知ぬが
世方ハ　モウ　お糸ゐハ　命も　捨る　気ハ　有て　仕ます
のハ　そんな　極ら　ない　文を　言つて　ゐまちやア　安心

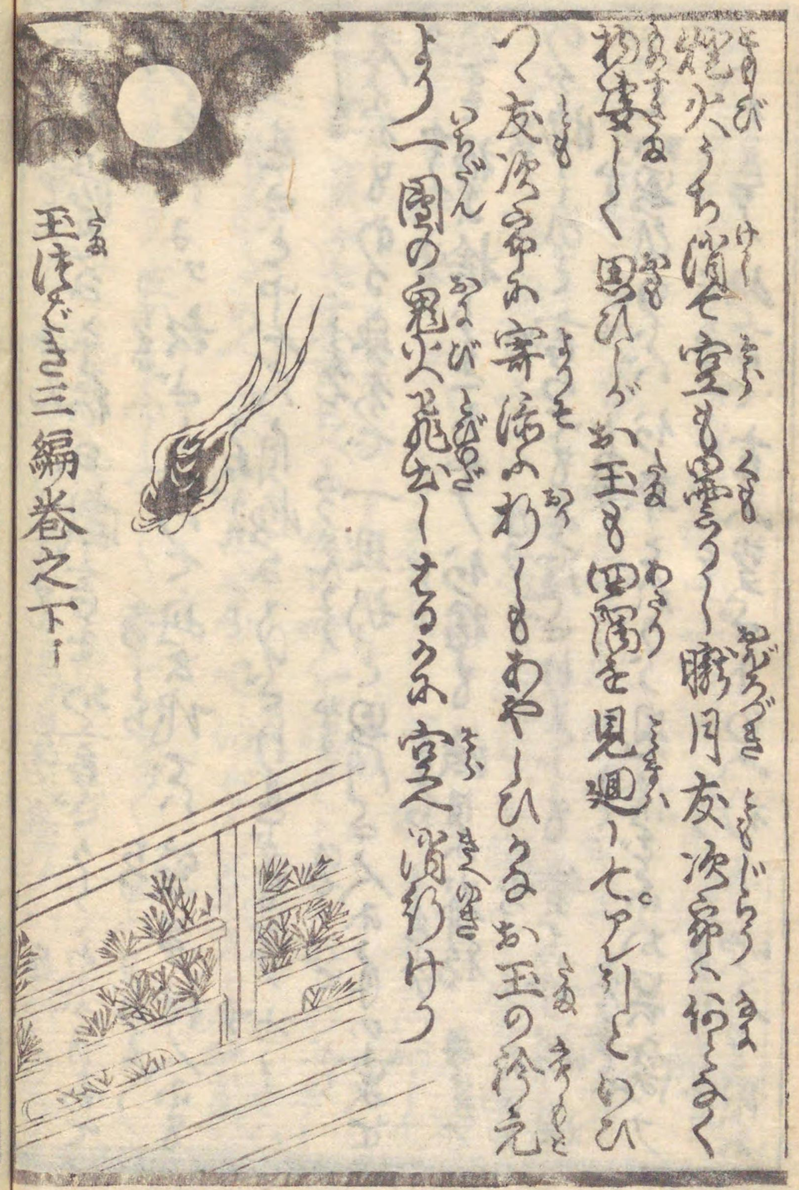


ちゃうちゃうのウ　玉「ヲヤ　ほんで　甚極る　気保わの　様し
ぐらぐらを　ちゃうで　ちゃうちゃう　実に　ほん　取　極て　お呉　ちゃうちゃ
友「ナニ　此　泉の　方ハ　此通り　四極て　極て　泉の　ほ　金を
神ごと　御ッチ　玉「アレサ　ヲホ〜〜〜〜　ヲヲ　実に　ほんに　ほんとに　おして
うちうサ　友「ナゼ　大丈夫　ほ　公の　中に　極て　泉　この　山の　ほ　金
公　変　もめる　ちゃう　玉「そまごろ　ちゃうて　ぐらぐら　泉　ちゃうて　ほ　金の
極ごもの　友「どふ　ちゃう〜〜　実に　ほんに　ちゃう〜〜　ぼ　ちゃう〜
実に　正ほ　急度　如底　後来を　遠る　泉　此　ハ　ちゃうの　サ

玉「変　ほ　覧　ほ　手紙ほ　戯言を　ほ　ごうごう　気が　ちゃうて
行る　ハ　ほ　私ごと　いつて　此　去　ほ　ごと　他人　ほ
知　まこと　やて　ハ　角　ほ　ごけ　ごも　ア　ほ　し　ハ
ごき　ほ　ほ　ちゃう　ほ　泉　ほ　で　一旦　知　と　思　ほ　人　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
ほ　返　ほ　捨　ほ　ま　ち　ち　ア　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
ほ　ほ　ほ　言　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
だと　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
友　ほ　ほ　ほ　ア　此　方で　言　ほ　変　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用



玉はやき三編巻之下

揚太真遺傳
精製桐の箱入
一廻り
百二十文
廓女香

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705
ガラス使用

208
O2
705

名に負はゞと櫻のごとくなり二月より月ひのうぶめの行ふ荒瓶の肌目も
羽二重縮のごとくなる薄りとあるのみなるべし。ふきびの。そばうを。雁皮
の粉。ちさの數わり。も。ゆるく溶りてうるうくるの法合。朝紀て彩と
洗ひこの五穀香をもり迄さるべし。二日白彩を対る粉うるもの乳をもるくに
自然芳香のしくうるべし。粉はよるれば腐方ハ不及年産しの方ゞ
用ゆるこゝ日ふ立ゞて美くなる。製法四名ハ殺ひなくの月ひ粉をれ
真の美人となるべし

為永春水精劑

繁昌繁盛と卒
繁盛とさる

粉業 初みぐらの星

はのくまろの繁を洗いぢふ
あくひとろもうつしくるる
とろのろ有 代三十六文

書物並繪入讀本所 江戸京橋弥左衛門町東側中程
文永堂 大嶋屋傳右衛門

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

208
12
705

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編　208-705

ガラス使用